

胃瘻造設した在宅療養者の主介護者における心理的変化のプロセス

キーワード：胃瘻造設、在宅療養者、主介護者、心理的変化

○五十嵐和子¹⁾、高口伊津子¹⁾、田頭久美子¹⁾、中野美佳¹⁾、田辺生子²⁾
すずらん訪問看護ステーション¹⁾ 新潟青陵大学²⁾

I 目的

胃瘻造設した在宅療養者の主介護者が胃瘻造設の説明を受けて造設するまでの心理的変化のプロセスを明らかにし、胃瘻造設の可能性のある利用者の家族に対するケアの改善に向けた示唆を得る。

II 方法

1 研究対象

50歳～80歳代の脳血管疾患等と診断され胃瘻造設した在宅療養者の主介護者9名。

2 研究期間

平成25年10月～平成25年11月

3 研究方法

対象者の自宅にてインタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した。調査内容は対象者の基本属性、胃瘻造設の説明を受けた際の気持ち、胃瘻造設選択時の思いに関する計8項目である。対象者の同意の上、研究者が対象者の話した内容を記述しながらインタビューを行った。その後、インタビュー中の研究者の記録を基に分析を行った。

4 分析方法

研究者の記録を元に、胃瘻造設の説明を受けてから造設を決定するまでの箇所を抽出し、内容の類似しているデータをまとめてカテゴリー化を行った。分析過程では質的研究経験者よりスーパーバイズを受けた。

5 倫理的配慮

調査対象者に、調査の趣旨、参加および中断の自由、同意しない場合にも訪問看護サービス利用に関して不利益を破らないこと、匿名性を確保することを書面を用いて説明し、同意を得た。

III 結果

対象者の平均年齢は64.7歳、胃瘻造設後の平均介護年数は5.7年であった。胃瘻造設前の主介護者の心理的変化のプロセスでは、11のカテゴリーが抽出された。以下の【】はカテゴリー、〈〉は概念とする。

胃瘻造設前の主介護者の心理的変化は、胃瘻造設の説明時は【医師からの説明】では〈医師の言葉で安心した〉という気持ちもあれば〈もっと医師に説明してほしい〉と思った主介護者もいた。【胃瘻のメリット】では〈胃瘻を造らない事へのリスク〉や胃瘻造設によって〈本人の具合が良くなる〉といった本人の状態の好転を期待する心境があった。【胃瘻は嫌だ】は状態が悪くても〈身体に穴をあけるのは嫌だ〉という嫌悪感であり【胃瘻に対する不安、恐れ】は胃瘻造設や胃

瘻への恐怖感や〈今後の介護に対する不安〉であった。

胃瘻造設の説明を聞いた直後は、【胃瘻はわかった】と【胃瘻はわからない】に分かれた。主介護者は胃瘻についてわかってもわからなくても、胃瘻造設の要否を選択しなければならなかった。

胃瘻造設の決定時は【生きるための選択】として対象者が〈生きていく為に胃瘻を選択した〉という主介護者と反対に、老々介護で〈胃瘻にして長生きする事への不安〉を訴えた主介護者もいた。また、主介護者自身の【介護負担の軽減】を考え〈胃瘻造設後に介護が軽減する事への期待〉も聞かれた。しかし、主介護者の多くが胃瘻造設の必要性和胃瘻への抵抗感の間で揺れつつも、胃瘻造設は【仕方がない】という気持ちであった。その中には、〈選択肢は胃瘻のみ〉という諦めや〈胃瘻への抵抗感〉という気持ちがあった。

主介護者の胃瘻造設の選択における心理的変化では、主介護者の【家族のサポート】があり【家族がいる安心感】の中で胃瘻造設選択が行われていた。

IV 考察

胃瘻造設前の主介護者は、胃瘻の説明における知識不足や理解不足により、ただ漠然とした不安や嫌悪感を抱いていた。胃瘻の理解度についても、個人の年齢や性格、その時の健康状態や精神状態までもが影響し、認識に違いが生じたと考える。認識の程度は違っても、【生きるための選択】として主介護者は療養者本人の存在価値と胃瘻造設という2つの価値観の間で苦悩し、最終的に【仕方がない】という思いで胃瘻を選択していた。しかし、家族の存在が、胃瘻造設という重い決断を行う際の負担感やジレンマを緩和し、それらを共に担う役割となっていたと考える。

V 結論

胃瘻造設前の主介護者の心理的変化のプロセスでは、11のカテゴリーが抽出された。

胃瘻造設の説明時、主介護者は【医師からの説明】を受け〈医師の言うとおりに〉〈もっと医師に説明してほしい〉と感じ、胃瘻について【胃瘻は嫌だ】【胃瘻に対する不安・恐れ】を感じた。そして、胃瘻造設の説明を受けた直後は、主介護者は【胃瘻について分かった】と【胃瘻について分からない】という反応だった。胃瘻造設の決定時、主介護者は【生きるための選択】として【仕方がない】という思いを持っていた。主介護者の胃瘻造設の選択における心理的変化では、【家族のサポート】を受け、胃瘻造設を選択していた。